

調査結果にみる高校教育の現状と課題 ——学校現場の視点から

埼玉県立不動岡高等学校教頭 久保島 昌一

高校で行われている学習指導は、入学期段階で生徒の実態が異なるために一律ではない。高校の数だけ学習指導の種類があるといっても過言ではない。今回の調査を現場からみると、これまで印象的、あるいは肌感覚として把握していた実態が裏づけを与えられたように鮮明に浮かび上がってくる。教員の指導は生徒の実態に影響を受けざるを得ないが、一方で、その実態に埋没せずに、どう生徒の力を伸ばしていくのが現場では大きな課題である。この多様な高校

において指導する側に焦点を当てた調査は、これまであまり行われてこなかっただけに、また、全国調査ということもあり、ここからみえるものは、今後の高校のゆくえを探るうえでも、多くの示唆を得ることができるといえる。さらに、同時期に実施した小・中学校の調査結果と比較してみることができ、日本の教育全体の学習指導の傾向を知ることができる。以下、高校調査に関して3つの点に注目したいと思う。

1. 高校における学習指導の多様性について

(1) 高校の分類

今回の調査では、中学校時代の成績（評定平均）別で分類している。上述したように、高校では入学期段階で生徒の実態が異なる。中学校の成績が絶対評価になり、学校によって評価基準に差があるのではないかという見方もあるが、他の項目との関連でみると、模試などの途中経過や出口の実績などで分類するよりもみえてくる実態は現場感覚に近いと思われる。それを端的に表しているのが、表2-1に示されるような教員の悩みにみる生徒の特徴であろう。

入学時の学力水準が低くなるにつれて「生徒の学習意欲が低い」「義務教育段階の学習内容が定着していない生徒が多い」などに悩む教員の比率が高くなり、総合学科、専門学科の傾向は普通科Cグループに近いことがわかる。これだけでも高校によって指導が一律にはいかないことが表れている。全体としてみると、生徒の中学校時代の成績が高校の指導を決めているといってもいいかもしれない。この点で中高の接続は重要な課題として浮かび上がってくる。

表2-1 生徒に関する教員の悩み【教員調査】

	全体	普通科	Aグループ	Bグループ	Cグループ	Dグループ	総合学科	専門学科
生徒の学習意欲が低い	80.7	78.3	49.2	76.6	92.9	91.3	89.5	87.3
義務教育段階の学習内容が定着していない生徒が多い	79.3	76.2	43.0	72.2	91.7	93.8	87.7	89.0
生徒間の学力差が大きくて授業がしにくい	64.9	63.1	45.5	57.6	74.9	77.6	71.4	71.1
生徒指導に時間がかかり過ぎる	44.8	40.9	13.8	28.4	59.1	74.4	58.2	55.3
生徒が何を考えているのかわからない	40.9	38.0	22.3	33.4	47.2	52.3	45.8	50.6

注1) 「とてもそう思う」＋「まあそう思う」の％。

注2) 教員の悩みについてたずねた15項目のうち、生徒に関する5項目のみを示した。

注3) ○は全体よりも5ポイント以上、●は10ポイント以上高いものを示す。

注4) □は全体よりも5ポイント以上、▬は10ポイント以上低いものを示す。

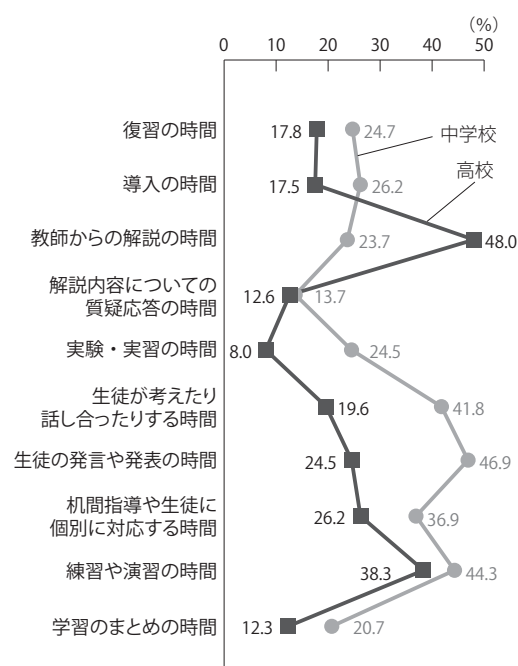
(2) 異なる実態が学習指導に与える影響

教員の悩みは学習指導に反映される。例えば、「義務教育段階の学習内容が定着していない生徒が多い」と感じている教員が多い高校グループほど、授業内容において「基礎的・基本的な知識・技能を習得する学習」(3章4節表3-4-1)や、授業の方法において「計算や漢字などの反復的な練習」(3章5節表3-5-1)に重点が置かれる傾向がみえる。学習が積み重ねることから当然のことであるし、現場感覚からもうなずける。ただし、注意が必要である。例えば、「基礎的・基本的な知識・技能を習得する学習」に関しては、普通科Aグループでも半数以上が「多くするように特に心がけている」と回答しているが、これを一律の基準でみることはできない。入学してくる生徒の実態の違いから、高校によって生徒に求められる基礎・基本のレベルが異なるからである。また、高校は中学校と違って同一教科の教科書でも難

易差があり、その種類も多い。高校によって採択される教科書は異なり、そこには学習指導に対する考え方の違いが反映される。このことは、「授業を進める際にどのようなことを大切にしているか」において、「教科書や指導要領の内容を、とにかく最後まで扱うこと」と「一通り終わりまでやれなくても、基本的な考え方を身につけさせること」における高校間の傾向の違いからもわかる(3章1節図3-1-6)。さらに、詳しくは触れられないが、高校の学習指導は生徒が望んでいる卒業後の進路にも大きく影響される。したがって、項目によっては高校間で同じような傾向の比率を示していても、指導の内実が異なる可能性があることを考慮に入れる必要がある。このことは、どの生徒にも学力をつけたいという思いは共通するが、高校教員は異動した勤務校の生徒の実態によって指導内容のレベルや重点などを変える必要があるということでもある。

2. 高校における学習指導の実態とあり方

図2-1 授業の時間の使い方や進め方【教員調査】
(中学校・高校別)



注) 「多くするように特に心がけている」の%。

現在、「学力向上」が全国的に謳われ、高校における確かな学力の保障は、学区が廃止された状況から生徒募集に大きく影響する。さらに学力の保障は当然進路実績にも影響し、それがまた生徒募集へと結びついていく。中学生・保護者にとって高校でどんな授業が行われているのかへの関心は、最近、かなり強まっているように感じる。一方、「授業改善」「授業力向上」などのスローガンを掲げる高校は多い。この点をふまえて中高の調査結果を比較すると、高校として考えるべき課題がいくつかみえてくる。そのうちの1つが図2-1にみられる傾向である。

中学校では「生徒が考えたり話し合ったりする時間」「生徒の発言や発表の時間」など、生徒が主体的に学習に参加するように心がけている傾向があるのに対して、高校では「教師からの解説の時間」が多くなる。授業方法においても「自分で調べることを取り入れた授業」「体験することを取り入れた授業」「表現活動を取り入れた授業」「グループ活動を取り入れた授

序章

業」「自由に論議する授業」などは高校のほうが少ない（表2-2）。一見して、中学校より高校の授業では、生徒は受け身になる印象がある。この調査結果から2つの課題が考えられる。

1つは、中高接続に関してである。発達段階の違い、高校での学習内容の専門化、高校の授業で求められる自主性などが中高の授業におけ

表2-2 授業の方法【教員調査】(中学校・高校別)

	(%)	
	中学校	高校
教師主導の講義形式の授業	9.6 <<	32.5
教科書にそった授業	29.1 <	34.6
自作プリントを使った授業	35.6	36.0
教材を工夫した授業（具体物を使うなど）	43.5 >>	26.8
自分で調べることを取り入れた授業	18.0 >	10.2
体験することを取り入れた授業	22.9 >>	7.2
表現活動を取り入れた授業	36.5 >>	11.5
個別学習を取り入れた授業	18.0 >	9.6
グループ活動を取り入れた授業	37.1 >>	8.6
自由に議論する授業	11.2 >	5.8
教科横断的な授業や合科的な授業	4.2	4.4
計算や漢字などの反復的な練習	29.0 >>	18.0
小テストの実施	33.8	31.0

注1) 「多くするように特に心がけている」の%。

注2) <>は5ポイント以上、<<>>は10ポイント以上の差があるものを示す。

3. 指導力の向上のための取り組み

図2-2は、教員調査で指導力の向上のために取り組んでいることをたずねたものである。

比率が高いのは、個人レベル、校内レベルでの取り組みである。校内レベルであっても、「先輩・同僚からアドバイスをもらう」は7割以下である。中学校教員調査でも傾向は似ているが、人を通じた学び合いや校外での学びに関して、中学校の数値はすべて高校を上回っている。例えば、「先輩・同僚からアドバイスをもらう」は中学校では7割を超えるし、「他校の教員と話し合う」も中学校は7割弱（高校は5割程度）である。ここから2つの点が気になることとしてみえてくる。

1つは、学校内の教師同士の信頼関係、協力・共同関係（同僚性）の問題である。教科の専門性の違いは中学校でも高校でもあるが、高校は中学校よりも教員間でのやり取りが少な

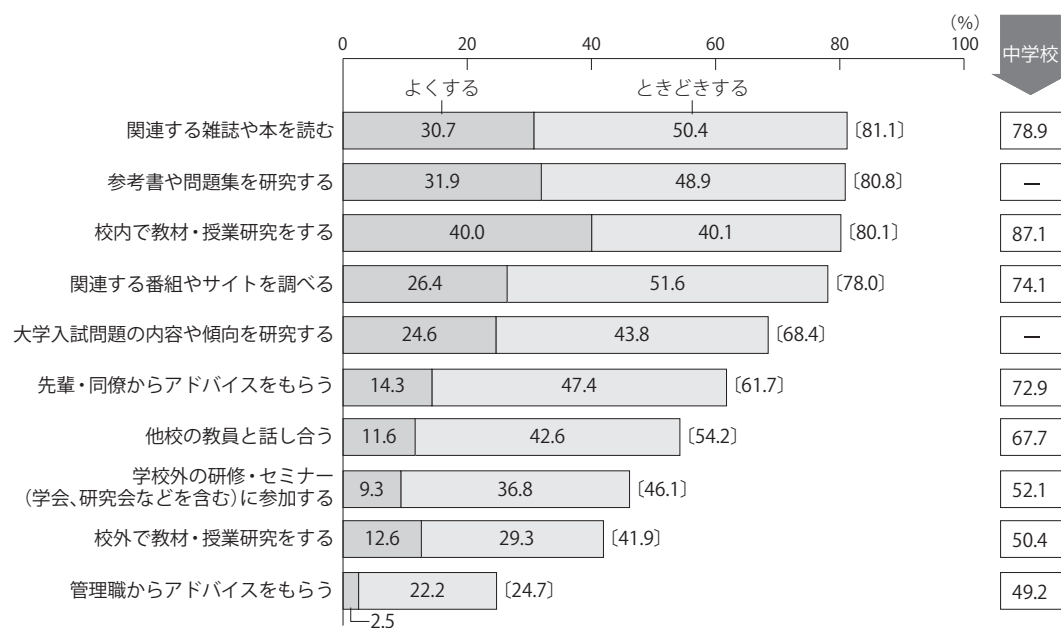
る指導の違いに影響しているだろうが、高校側としては、各校の実態の違いはあるが、少なくとも入学してくる生徒が中学校でそのような授業を受けてきていることを考慮に入れる必要がある。この点から、高校の導入期指導の重要性が課題として浮かび上がる。

2つめは、高校の学習指導のあり方に関してである。新学習指導要領では「知識・技能の活用」「探究活動」に重点が置かれる。このことは、どれだけ生徒が主体的な学びに向かっているかが問われることである。調査結果では、高校で多い授業方法は「教師主導の講義形式の授業」「教科書にそった授業」「自作プリントを使った授業」「教材を工夫した授業（具体物を使うなど）」である。生徒の実態から学校種によって学習指導における重点の置き方に違いがあり、また、グループ活動や調べ学習などが成立しにくい高校もあることは事実だが、学力の保障という点から考えると、調査結果に表れているような高校の学習指導が生徒を主体的な学びに向かわせているのか、改めて考える必要があるのではないだろうか。

い傾向があるということである。もちろん中高で状況が異なる点が多くあるのは事実で、また、同僚性が中学校でどうなっているかという問題もあるが、同じように高校での同僚性はどうかののだろうかという疑問は残る。組織的な取り組みができている高校が成果を上げているとよくいわれるが、同僚性を含んだ組織的な取り組みが指導力向上のカギであるとすれば、この調査結果は気になることである。最近が増えてきてはいるが、高校での組織的な授業研究はまだまだ少ない。このことも数値に表れているのかもしれない。

2つめは、「学校外の研修・セミナー（学会、研究会などを含む）に参加する」や「他校の教員と話し合う」など校外での学びが、他の項目と比べて相対的に低いことである。このことは指導力向上の取り組みが内輪で行われている傾向があるということである。個人レ

図2-2 指導力を高めるための取り組み【教員調査】（全体）



注1) [] 内は、高校教員の「よくする」+「ときどきする」の%。
 注2) グラフの右の数値は、中学校教員の「よくする」+「ときどきする」の%。
 注3) 中学校教員には、「参考書や問題集を研究する」「大学入試問題の内容や傾向を研究する」はたずねていない。

ベル、校内レベルで取り組みを完結してしまうということは、新しいものが入りにくいということでもある。背景に多忙化の問題があり、校外に出にくいことも事実である。しかし、学校外の状況や時代の変化に対応して指導内容・方法を見直す必要もあり、また、入学してくる生徒の実態が高校によって異なる状況から、学校外の現状を把握しなければならないことも事実である。最近、各地でみられるようになってきた高校間のネットワークづくりの動きは、高校の指導が単独の工夫だけでは限界があることの表れとみることができる。1つめの同僚性の問

題と合わせて、指導力向上のために、校内と校外をどうつないでいくか、大きな課題ではないかと思われる。

以上、現場にいる者の一人として、調査結果からみえてくることを述べたが、高校は多様であるがゆえに、全体として高校がどこに向かっているのかは現場でもわかりにくい。今後、さらに専門的な見地から詳細な分析が行われ、高校教育の多様化のゆくえが少しでもみえるようになることを期待したい。